

少しはやる気になって、先生と一緒に活動する子

岸 田 富 夫

はじめに

K男は小さい時から虚弱で、両親も一人息子を溺愛し、甘え、わがまま、依存的な態度を許されてきた。中学部になるとそれに、思春期特有の不安定さや反抗的態度が加わり、学校では無気力、家庭では暴れ等多々問題を起こすようになった。このK男に、身体的な改善を心がけると同時にK男の好きな活動の多くある遊び的労働を中心とした生活で自分を思いきり表現させた。また、家庭的な雰囲気の中にも厳しさのある学級づくり、レポートづくりを工夫した。その結果、援助を受けながらではあるが少しずつやる気も出てきだし、今年は、まだまだ他律的だが自分を励まして少しは自律的な面も見え始め、力を発揮しだした。その経過について述べてみる。

1 プロフィール

(1) 生育歴

- ・昭和52年5月23日生 13歳4か月 中学部2年男子
- ・熟産、帝王切開、大声で泣かず、哺乳力も弱い。 ・1歳6か月の時、ダウン症候群と診断。
- ・2歳歩行器を使用。 ・3歳6か月県立療育園に入園、歩行開始。 ・5歳若草学園に入園。
- ・6歳11か月本校小学部に入学。2、3年生の時に、抽出養訓で機能訓練を受け、よく歩けるようになる。 ・12歳11か月本校中学部に入学。
- ・昭和62年6月に、県立中央病院より両外反足と診断。両足底装具を装着。
- ・本年度、中学部2年に進級。2人の担任とも持ち上がりである。

(2) 諸検査による実態

- ・身長158.3cm、体重64.6kg、ローレル指数163 (太り過ぎ)
- ・発達年齢 (津守式乳幼児発達診断 H. 3. 4)

運 動	探 索	社 会	生 活 習 慣	言 語
2歳6か月	3 歳	3 歳	5 歳	3 歳



サーキットに取り組むK男

(3) 行動特性

- ・動作が緩慢で、依存心が強く、集団行動に遅れがちだが、自分の必要な時の動作は素早い。
- ・自分の気に入らないことや、思い通りにならないことがあると、唇に爪を立てる自傷行為があり、家庭では、物を投げたりすることもある。
- ・MEPAでは、第4ステージが中心であり、運動、感覚の姿勢、言語の表出で、落込みを見せる。実際の生活行動では、気分や思い、やる気などに左右されて、得点ほど、活動できていない。
- ・表出言語が少なく、身振りで意志を伝えようとしがちである。

- ・人懐っこく、時々いたずらをして相手の様子を見ることがある。
- ・人がしていることはよく観察しており、自分もやりたがる。
- ・担任の指示なら何とかきける。

2 取り組みの構想

(1) やる気を持って行動するためにつけたい力

K男の諸検査や行動特性から本年度は昨年度の取り組みを踏まえ、

- ・少しの指示で、さっと動ける意志力、自分を頑張らせる力。
- ・好きなことやしなければならないことなら頑張ってやり遂げる力
- ・思春期特有の不安定さからくる行動のむらやいらいを解消する力

つけたい力をこの3点に絞り、次のような指導構想を立て、実践していくことにした。

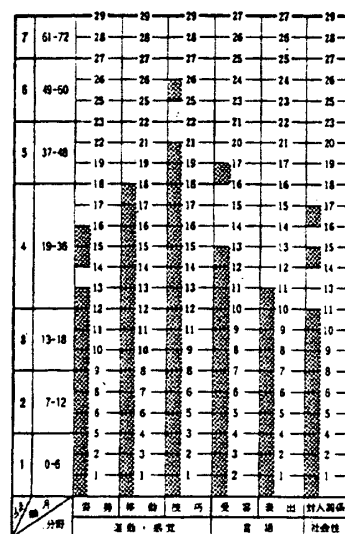


図1 MAPA

プロフィール表

(2) 指導仮説

思春期特有の行動のむら、肥満や発達の遅れからくる運動技能の遅れ等を考慮しながら、楽しんでもからだの動かせる「リズム表現」や「サーキット運動」に取り組ませる。また、教師と一緒に好きな活動、自分なりの参加場面の多くある生活単元学習で色々なことに取り組ませ、持っている力を色々な形に表現させる。これらのことはエネルギーの発散、満足感、自信としていらいや無気力を改善するばかりではなく、肥満の抑制、技能の向上など身体的な改善にもつながる。その際に、指示の与え方、約束の仕方等の工夫によって、更にやる気を持って自主的に行動する力も育てられる。

(3) 指導方針

指導仮説を検証するため以下の3つの方針を立てた。

① 身体的な改善

マラソン、リズム表現、サーキット、サッカー、水泳などでエネルギーの発散を促すと同時に、虚弱・肥満体質を改善し、行動力を育てる。

② 精神的な改善

生活単元学習の場面や日常生活指導の場面を中心に、できること好きなことに最後まで取り組ませ、意欲、活気、やる気を育てる。

③ 他律から自律へ

担任との約束をつくり、他律的に自己コントロールする力から、自律化を目指す。

特にその手だてとして大切にしたのは

- ・楽しいことをする。楽しみなことをする
- ・繰り返して、見通しと自信を持たせる
- ・できることを1つずつ増やしていく
- ・大人の道具を使わせる。
- ・少しは追い込んだり、やり通させたり、つっぱねたりすることを指導に取り入れた。

3 指導の実際

(1) 身体的な改善

① サーキット運動・リズム表現

13頁のBコースに示すように、スタート場面は厳しく指導し、終りの場面にくすぐるなどの楽しみを入れたプログラムで取り組んだ。

表1の2学期の評価段階（試案）が示すように、段階の伸びはあまりないが、小さな変化や自分で取り組もうとする姿勢がみられた。また、音楽に合わせて身体を動かすことはK男にとっては好きな活動の1つであり、リズム表現の導入により、腕が伸びていない、身体全体を使つての動きがぎこちない等の問題はあるが、いきいきと積極的に身体を動かしている姿がみられた。

② 水泳

危険を伴う水泳であるが、昨年度と比べ、シャワーを自分で浴びる、体操する、水中歩行からビート板を使用して身体を水平にする、水中ジャンプをする等のプール学習への積極性、意欲的な取り組みと変容がみられた。

(2) 精神的な改善

① 生活単元学習

「野外炊飯」「臨海学校」等の単元で、木工や調理活動に取り組ませた。

木工は、鋸や金槌等の大人の道具が使える、柱を切った・釘を打ったと自分の活動が、自分で評価できる特徴を持っている。「できた」という満足感や周りから「やったー」「すごい」と誉められることで、自信を持ち、次の仕事に挑戦する意欲につながった。

調理は、やり遂げないと食べられないことを最大限に利用し、少しは追い込んで、最後までやりきらせるように指導した。「お好み焼き」作りでは31頁の事例のように、最初出来なかった海老の皮むきも、5回繰り返すうちに出来るようになったり、ヘラでお好み焼きをひっくり返すことまでするようになり、かなり自信を持ってきた。

② 日常生活の指導での取り組み

1学期中頃、家庭でのK男の様子に変化があり、以下のような問題行動が多くなってきた。

- ・衣類を全部脱いでまっ裸になってしまう
- ・頭を壁に打ちつける
- ・唇を爪でかく
- ・物を投げる、壊す等

学校では、余り見られない行為ではあるが、思春期特有の不安定さからくるいらいらで、何時でも甘えられる家庭でそれを出している行動か、学校の指導と家庭のそれとのギャップが関係していることも考えられ、保護者と連絡を更に密に取りながら以下のことを共通理解し、学校でも実践した。

- ・待つ姿勢……とにかく、時間の許す限り、K男が取り組み始めるのを待ってみる。

表1 室内サーキット段階表（試案）

	1 段階	2 段階	3 段階
エース舞 またぎ越し 通り抜け ・平衡感覚	・補助を受けて △ ○	・ひとりで ○	・交互に足を動か かし
ゴム跳び ・下腿の筋力 ・敏捷・協応性	・補助を受けて 跳ぶ △ ○	・ひとりでなん とか跳ぶ	・くるぶしの高 さを跳ぶ
マット （ころがり） ・身体意識 ・敏捷・協応性	・ひとりでなん とか横転をす る（補助） △	・ひとりでス ムーズに横転す る	・ひとりでなん とか前転する （補助） ○
トンネルくぐり ・身体意識 ・協応性	・ひとりでなん とか通り抜け る △	・両手を背いて から足を揃え る ○	・手と足を協応 させながら
ろくほくのぼり ・筋力（上腕） ・目と手の協応性	・なんとかのぼ る （1段階でも） △	・のぼり、タン プリンを打つ （補助） △	・ひとりでのぼ り、タンプリ ンを打つ ○
上体そらし （セラピーボール） ・筋力（背筋） ・柔軟性	・身体をもたれ かける △	・上に身体を乗 せる △	・脱力し、動き に身体をそわ せる ○

● 3段階より上は、Aコースの1段階か4段階につながっていく。
△ … 5月 ○ … 10月

・厳しさと優しさ……自分でしなくてはならないことは、絶対にさせる。その代わり、出来た時には十分に誉める。

・肥満対策……なるべく不必要な間食は与えない。カロリーの低い食品（わかめ、こんにゃく等）、繊維質の食品（野菜全般）を多く取らせ排便を促す。なるべく外に出て散歩等の運動をする。

家庭ではなかなか実践が困難で、保護者が精神的に疲れてしまいそうになった時には、安定している学校で、放課後もできるだけ残して、より安定を図る一方、家庭での受け入れ体制の回復強化も図ったりした。

③ 他律から自律へ

K男が行動を起こす大きなポイントの1つに担任との人間関係がある。「ある時は包み込んで、ある時には厳しく」の2年間の中に、少しずつ言葉少なく行動を指示したり、「5数えるまで」とか「～を済ませてから」といった約束を入れ込んできた。この人間関係の育ちが、言わなくてもさっと行動を起こす等、K男の自律的な姿勢へと変化を与えた大きな要因になっている。

4 指導の結果と考察

運動的な取り組み、家庭との協力、生活単元学習等での意欲的な高まりによって、K男に少しずつ変容がみられだした。右の図2は、身長と体重、ローレル指数の変容を示したものである。4月～5月の一時期、入院し、精神的による不安定を食べさせることで防止した結果、体重が増えていたが、その後ローレル指数が「太りすぎ」の160台から「太っている」の150台に変わっている。また、身体的な改善もプラスに作用したのか、7月ごろから遅刻がなくなる、朝の登校がスムーズになってきた。また、9月の運動会では、道具作りで、真結びに挑戦してできるようになったり、リレーの選手で1人で走ることができた。また、バス通学ができたす、等やる気を持って取り組む場面が多くなった。このことは担任、親を喜ばせ、その喜びがK男に、より意欲を持たせるという、好循環によってK男を更に意欲的にし、今まで、さっと行動できなくて「1・2・3…」と声かけしていた手だても、最近では段々必要となくなっている。しかも、明るい笑顔、大きい声での会話が段々できだしている。

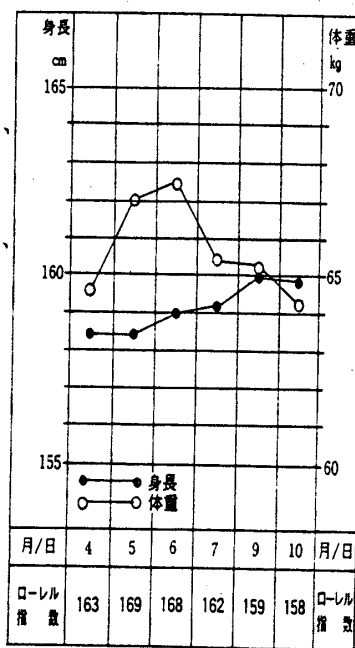


図2 身長・体重
ローレル指数

5 今後の課題

色々な取り組みをしてきて良い面もたくさん見られてきたが、K男の思春期の不安定さが完全に解消されたものではなく、対応によってはパニックも起こる可能性を秘めている。常にK男が、いきいきと取り組める学校生活の準備や、好きなことだけでなく、遊びや仕事等どんな活動でも取り組める態度作り等、残される課題は多い。また、K男の動作の緩慢さの原因となっている肥満の解消への取り組みも、引き続き取り組んでいかなければならないと考える。